

授業で使える当館所蔵地図

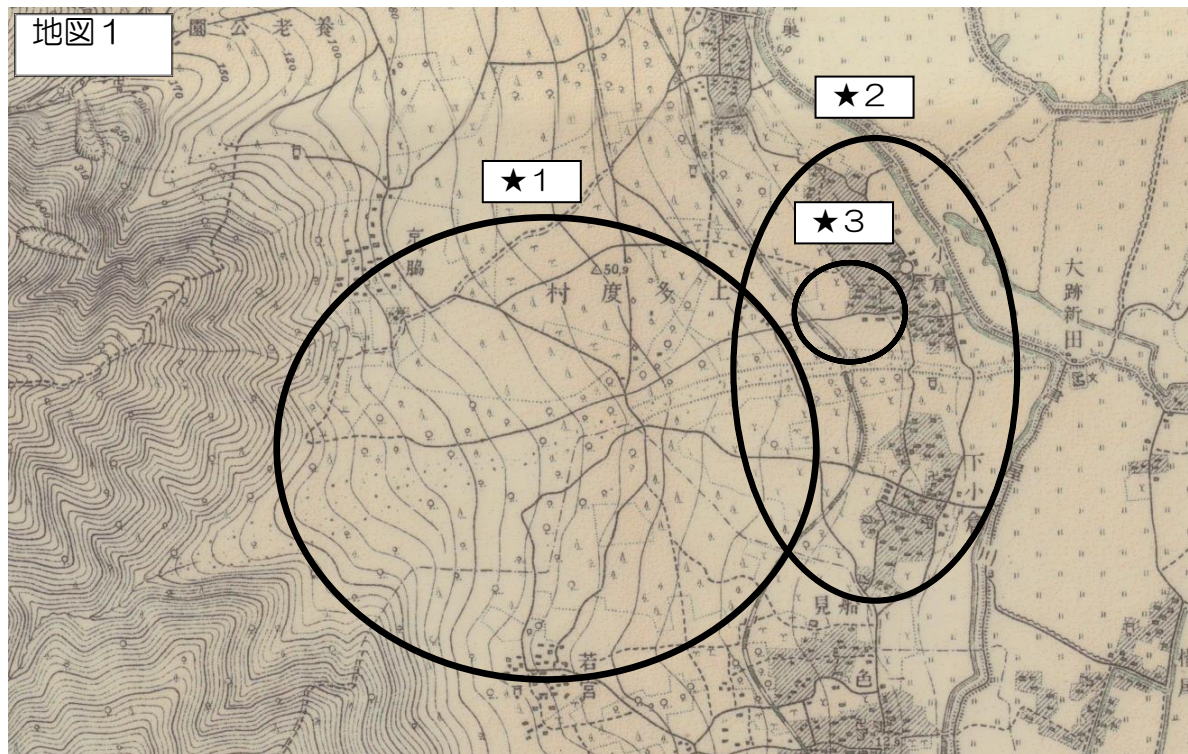
No. 98—地図1 『2万5千分の1地形図 養老』 (部分)

作成年：大正13 (1924) 年

サイズ：42×52cm

作 者：大日本帝国陸地測量部

地図1



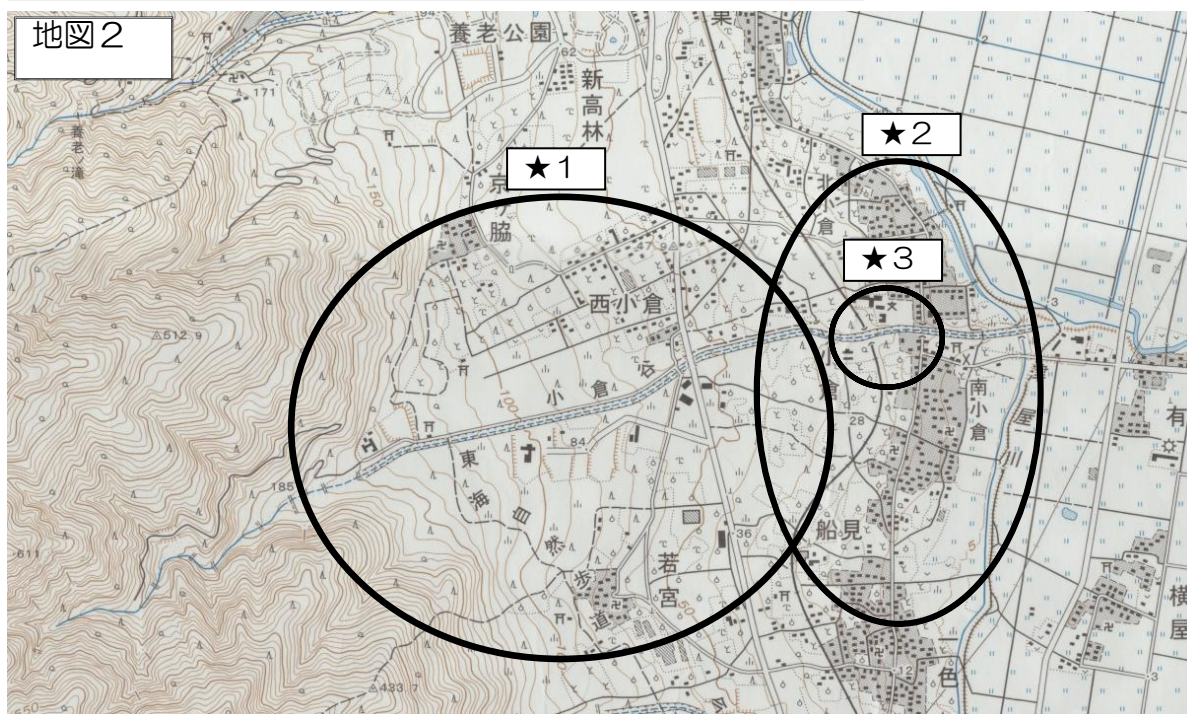
No. 98—地図2 『2万5千分の1地形図 養老』 (部分)

作成年：平成21 (2009) 年

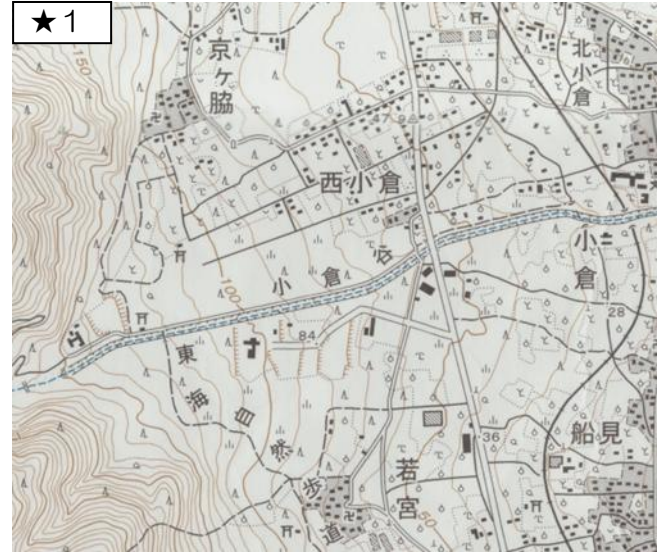
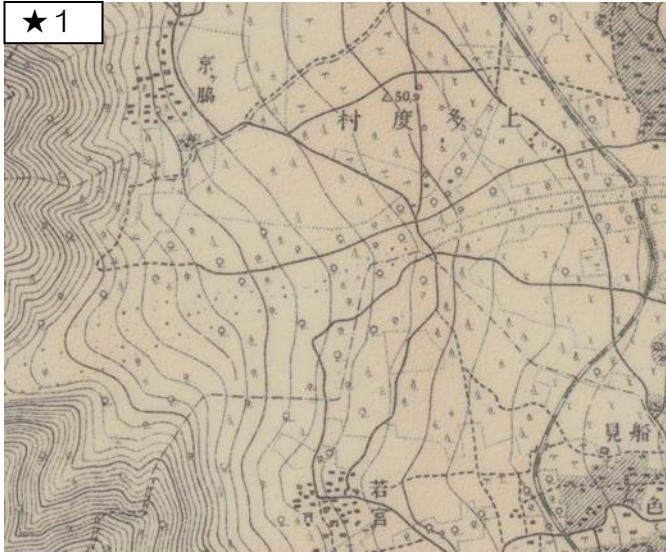
サイズ：42×52cm

作 者：国土地理院

地図2



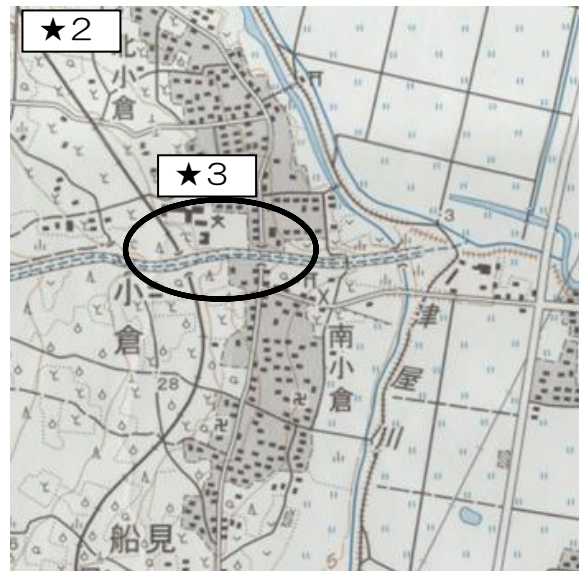
【解説】 岐阜県と三重県の境にある養老山地は、養老断層に沿った隆起によって今も形成され続けている傾動山地である。養老断層の東側（平野側）が沈降、西側（山地側）が隆起する構造のため河川の流れが急で谷から運ばれる土砂量が非常に多い特徴がある。そのため、山麓には複合扇状地が発達している。今回紹介する「小倉谷（おぐらだに）扇状地」はその中でも最も大きい扇状地の1つである。小倉谷扇状地を地形図で見ると、扇頂・扇央・扇端の特徴がはっきり現れており、地形が人々の生活に与える影響について考える教材として適している。さらに、図1と図2の小倉谷扇状地の土地利用を比較することで、より地形や地域への理解を深めることができる。



★1 扇央の土地利用

山間部を流れてきた河川は、山地から平野に出る地点で勾配が急に緩くなるため、土砂の運搬力が小さくなり大きな礫（れき）が堆積する。すると粒の大きな礫層に河川が伏流し、「水無川（みずなしがわ）」になる。河川が伏流する扇央では水が得にくいいため、畑や果樹園として利用されていることが2つの地図から分かる。図1に果樹園と表記されていた小倉谷の北側の地域に、図2には「西小倉」という集落が見られるようになった。『ふるさと上多度』（養老町立上多度小学校編・発行、昭和61（1986）年）によれば、集落「西小倉」の起源は、戦時中に満州の開拓に従事していた人々が、戦後日本に引き揚げて「小倉」に入植したことに始まる。厳しい開拓生活の中で、計画的に集落や道路が形成された。

その後、昭和29（1954）年の町村合併の際に「小倉」から分離し、「西小倉」として発足した。



★2 扇端の土地利用

地図を見ると、鉄道が東に緩やかにカーブしている。等高線から、鉄道が地形に合わせて同じ標高を通るように敷かれていることが分かる。この付近は扇端であり、同じ標高の地点が扇状に広がっている。扇端では、伏流していた河川の水が地表に湧出するため水が得やすく、集落が立地しやすい。さらにその外側は、水田としても利用される。図1に比べて図2には集落の規模が大きくなり、道路が整備されていることが分かる。

★3 天井川（てんじょうがわ）の形成

「小倉」や「南小倉」周辺では、川の下を鉄道や道路がはしっていることがわかる。このような地形を「天井川」という。土砂の供給量が多い河川では、河道を堤防によって固定すると、堤防内に土砂が堆積して河床が高くなる。河床が高くなると洪水の危険が高まるため、さらに堤防をかさ上げすることになる。この繰り返しによって河床が両側の平野よりも高い天井川が形成される。

【利用の例】

○高等学校の地理総合や地理探究の「河川がつくる地形と人々の生活」「地形図の利用」の授業に活用することができる。